

幼馴染の結婚式前夜、彼女は俺 の部屋に来た

明日人妻になる幼馴染との、最初で最後の夜——逆NTR
寄りの背徳

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

彼女は静寂に溶け込むように、彼の枕元に降り立っていた。二十八年という歳月が肌に刻み込んだその柔らかな輪郭は、かつて誰よりも愛おしかったものを今、どこか懐かしい遠さで見つめているかのようだ。部屋の中にはまだ花婿の薫りが漂っているが、それを無視するかのように、彼女だけが息をする音を立てて空気を震わせていた。春の訪れを感じさせる微かな風が窓辺から流れ込み、二人の間に張り詰めた電流をさらに増幅させたままだった。

拓海はベッドの上で目を閉じ、数秒間だけその存在を感じ取ろうとした。長年交わした想いが結ばれようとしていないこの夜、なぜか彼は少しだけ緊張していた。それは単なる再会ではない。明日からは別の女、あるいは別の男と名乗る伴侶を得ることになる彼にとって、今夜はこの部屋の主権を奪われるような、背徳的な宴の前奏であることに気が付いていたからだ。彼女はいつものように軽やかな足取りだったが、今はそこにあるすべてを包摂し、飲み込むかのような重厚な視線を向けていた。

「久しぶりね」

声は低く、まるで囁きさえも届かないほどに抑え込まれた。彼女の唇が彼の肩先へと触れ、温もりが伝わり始めた。手触りは驚くほど滑らかでありながら、指先の圧力は控えめではなかった。そこには欲求不満という名の熱意が隠されており、彼の肌をそっと撫で上げるたびに、膨らむ鼓動が部屋中に響き渡っていく。

拓海は開いた目に映る彼女の姿に戸惑うかのように瞬きを繰り返す。「また、私のこと見てるの？」そう呟くと、彼女は一層深く息を吐き出し、拓海の襟元へと手を伸ばした。そこには春の日差しに焼かれたような蜜のような肌が露わになり、花婿から譲り受けたこの身体の一部だけが、まだ主人のものとして認識されている儚さを漂わせていた。

二人の間には、言葉にできない距離感が流れていた。それは慣れ親しんだ日常と、今ここで発生している特別な時間が交錯する隙間だった。彼女はいつもの笑顔を手放さず、しかしその奥底には「もうすぐ全てが変わる」という予感が湛えていた。このままではどうなるのか、明日までの数時間という限られた時間を恐れるように、彼女は拓海の頬へ、額へ、そして喉元に唇を重ねていった。唾液の甘さが舌尖から伝わり、互いの体温が融合していく感覚は、まるで燃え盛る炎の直前のような緊張感を含んでいた。

「明日からは……誰かのものになるみたいね」

彼女は自らの胸に手を当てながら呟く。そこにあるのは、既成事実としての結婚という枷と、それでもなおこの部屋で貪られるかのように振る舞う彼女の奔放さ。拓海はその問いかけに答える言葉を失い、ただ彼女の手を握り返すばかりだった。指先から滲み出る熱意は、単なる触覚を超えた何かへと昇華され、彼らの関係性を曖昧な境界線上に引き裂いていくような力強さを持っていた。

彼女はゆっくりと体を預け、彼の膝の上へと滑り落ちた。重力に従って二人の距離が縮まり、世界が狭まってく。外の喧騒や、明日待ち遠しい新郎新婦の準備など、すべてがこの仄暗い室内で薄らぐように見える。その隙間には、古びた愛と新しい情熱が入り混じった独特の香りが立ち上り、二人の世界だけを切り離して浮かび上がらせていた。

「もっと……近くにしてよ」

彼女はそう願うように目を閉じ、唇を重ねようとする瞬間、空気が弾ける音がしたのかと思うほど緊張が高まった。それは行為そのものが始まろうとしているのではなく、むしろその予感だけが先走って二人の心を揺さぶっているような状態だ。彼女は「いつもの彼女」というラベルをはぎ取られ、今夜だけの特権階級としてこの部屋に君臨

しようとしつつも、拓海の視線がどこかへ逸れるのを恐れるように、自分の存在を再確認していた。

「なんて、私じゃダメなの？」

彼女の自嘲気味な微笑みが消え、再び本格的な掠れ足の感触が彼らの肌を刺激する。春の夜風さえも、二人の息遣いに飲み込まれてしまいそうなほど、密やかな熱気が部屋を満たしていく。それは単なる身体的な接触ではなく、長年積み重ねてきた無言の理解が、今や言葉以上の形で爆発寸前であるかのようだ。

彼はただ彼女を包み込むように腕を組み、世界から隔絶されたこの狭い空間で、明日という確かな現実と、今夜という夢幻的な時間をどう切り分けていくかを考え込んだ。彼女は彼の鼓動に合わせて脈打つ胸元へと顔を埋め込み、まるで魂まで吸い取りたげているかのような深いため息を吐いた。

「ああ……拓海」

名前の呼ばれ方そのものが愛撫のように響き、彼女はもう一度口を開いて、彼の耳元へとそっと息を吹きかけようとした。その瞬間、部屋の隅々から溢れ出す蜜のような空気感の中で、二人の関係性が不可逆的に変化していく予感が、鮮烈に彼らを襲ったのであった。



——ここから先は製品版でお楽しみください——